

訪 問 国 : デンマーク

研修テーマ : 特別支援教育の充実

所属名 千葉市立末広中学校

氏 名 渡 邊 幸 也

1 はじめに

国連の「障害者の権利に関する条約」を平成 26 年 1 月 20 日に批准した。また、平成 28 年 4 月からは「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」も施行される。これにより、「合理的配慮」が本格的に学校現場でも求められることになり、インクルーシブな社会に向けての体制整備が加速していくことが予想される。

デンマークは 2012 年にフォルケスコールン法が改正（国民学校法。公立学校の教育法令。以降「法改正」と記載）され、インクルーシブ教育に大きく舵を切ることになった。デンマークは「ノーマライゼーションの理念」が誕生した国でもある。日本よりも先進的な取組をしているデンマークの教育制度、学校教育について調査をすることで、少しでも千葉市の特別支援教育の充実・発展に生かすことができればと考えた。

2 デンマークの教育制度

デンマークは、「義務教育発祥の地」であり、社会保障制度も充実している。出生時から専属の家庭医が付き、乳児期から見守る。

（1）幼児教育（0～5 歳）

ほとんどの子供が 0 歳から保育所に入所。3 歳からは幼稚園に入園する。様々な角度から子供の成長を見守る。保育所・幼稚園は、インクルージョンの基礎作りと捉えられ、場を分けた保育・教育を行わない。重複障害がある乳幼児の場合は、特別支援の保育所がある。

（2）義務教育（6～16 歳：フォルケスコール）

6 歳（0 学年）から 16 歳（9 学年）までの、日本でいう小中一貫教育を実施している。義務教育期間中は、定期テストなどのテストは一切行わない。「9 学年」で、国内統一の「卒業試験（学力試験）」が実施される。また、9 年生を修了後、本人及び保護者の希望（学習や心理的な発達状況など）に応じて、義務教育を一年間延長し「10 学年」まで在籍できる。法改正により一日の授業時数が 2

～3 時間増加した。授業時数の増加に伴い、子供の集中力の低下が懸念された。そのため 1 時間の学習中に身体を動かす活動を取り入れることが国より通達され、一日の授業で合計 45 分間は身体を動かす活動にあてることになっている。

（3）特別支援教育

特別支援教育が必要かどうかの判断は、教育心理相談所（PPR）が行う。PPR は心理士、言語療法士、社会福祉士等の専門家で構成されており、子供のニーズを判定し、保育士（教員）・保護者に、園や家庭での子どもへの指導について聞き取りをする。これにより PPR は、子供の支援の方向性を見いだす。最終的に特別支援学校・特別支援学級へ入級する場合は、在籍校の校長が特別支援学校・特別支援学級設置校へ申請し、申請を受けた学校長が判定をすることになる。インクルージョンを促進するための施策として、学校の予算を子供の数に応じて各学校に配布することになっている。特別支援学校・特別支援学級に子供を転学させる場合には、本来在籍すべき学校から、転学先の学校にその子供分の経費を支払う形式を取る。国としては 2015 年までに特別支援学校・特別支援学級在籍の子供を全体の 4 %に、2020 年までには 3 %に抑える（97%の子供はインクルージョンされた場で生活する）ことを目標にしている。

（4）指導員（ペダゴギー）

ペダゴギーの役割は幅広い。子供にも大人にも、特別な支援が必要な人にはペダゴギーが支援にあたる。教員を養成する大学があるように、ペダゴギー養成大学が存在する。教育では、特別な支援が必要な子どもに放課後支援をしていたが、法改正により学習の支援も行うことになった。授業中は、マンツーマンで学習の補助を行っている。

（5）LP モデル

「社会や子供の前提条件に関係なく、学習のよい条件を提供する学習環境の構築をすることを目的とする」というものである（是永2012）。つま

り子供を取り巻く環境（家庭・施設・教員・医療機関等）を整えることで、子供の可能性を伸ばそうというものである。その環境の中で一番大切なのは教師の指導力だと教育行政の担当者が話をしていた。

（6）その他の学校（私立学校）

デンマークの独特な学校制度を紹介する。

①エフタースコーレ（15～17歳）

全寮制の私立学校。8年生～9年生に編入し、3年間の教育を受ける。国内に246校あり、そのうち特別支援は18校。実習形式の学習が中心。様々な事情で国民学校での学習が困難な子供の受け皿であり、近年ニーズが高まっている。卒業後は、就職となる。

②フォイスコーレン（18歳～）

18歳以上の成人を対象にした寄宿制のフリースクール。国内に60校ある。誰でも自由に学べる。年齢制限や入学試験はなく、卒業試験や単位修得の制度もない。訪問した「エグモントフォイスコーレン」は、障害者と健常者が共同生活を行っていた。日本人も、多数留学をしている。

3 学校訪問をして

（1）ゴッドヴァッドエフタースコーレ

デンマークで最初のスペシャルエフタースコーレ。特別なニーズがある人を対象に受け入れる。座学はほとんど行わず、15パートの作業を行い基礎的な学習を兼ねる。日本の特別支援学校の「作業学習」とほぼ同じ内容である。また、全員の個別の指導計画を作成している。法改正により、国民学校でのインクルーシブ教育への不安（（6）①参照）から保護者の相談が急増し、子供の数も増加している。校長先生の「誰でも学べるということを学ぶことができる」「全ての人は人間の共同体に入るために支援が必要である」「全ての人は人間の共同体に入る権利がある」という話は、インクルーシブ教育に通じるものだと感じた。

（2）パークバイエンスコーレ

特別支援学級が設置されている小中学校。9学年を3学年ごとのグループに分け、それぞれに特別支援学級を設置している。特別支援学級は、同

じグループのエリア内に設置され、学校行事・学年行事に参加している。特別支援学級では9年生時の卒業試験を受けることができる学力をつけることを目標としており、75%の子供が試験を受けるレベルまでになった。個別の指導計画は年に4回の修正が行われ、年に1回、再評価会議を開催する。参加者は学校（生徒に関わる全職員）と行政、本来在籍すべき学校の職員（居住地の学校）で構成される。また、タブレットが配布されており、学習に活用すると共に保護者がいつでも個別の指導計画等を閲覧できるシステムを構築している。また、特別支援学級の子供の個々の能力に応じ、できるだけ通常の学級で授業を受けることができるようにしている。



4 研修成果の活用

デンマークはLPモデルに基づいた教育をしている。学校の中には教職員だけではなく、ペダゴギーをはじめ、PT・OT・STに加えてAKTという専門家が校内にいる。それぞれの専門分野を生かし、チームで支援をしている。コペンハーゲン市は、すべての子供に個別の指導計画を作成し、個々の特性に応じた教育を行っている。このように、子供の可能性を伸ばすために、子供を取り巻く人的、物的環境を整えることは、一人一人のニーズに応じた教育に必要である。デンマークの特別支援教育は、千葉市の特別支援教育の重点目標と重なる部分が多い。特に個別の指導計画を活用したチームでの支援や関係機関との連携は、さらに重要になる。中学校では、小学校や関係機関とのケース会議を開催し、子供の支援が継続的にできるようにしたい。研修会等では、特別支援教育担当者だけではなく通常の学級の先生方にもデンマークの特別支援教育について伝えることで、特別支援教育の一層の推進に尽力していきたい。